ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』の提起した問題

渡辺　昭

はじめに

第一次世界大戦の前夜に「帝国主義の経済学的説明のために」書かれたローザ・ルクセンブルクの主著『資本蓄積論』(Rosa Luxemburg, *Die Akkumulation des Kapitals, Ein Beitrag zur ökonomischen Erklärung des Imperialismus*, Berlin 1913. 長谷部文雄訳『資本蓄積論』上・中・下、一九五二・五三・五五年、青木文庫。——以下の引用にさいしては、まぎらわしい場合のほかは、原書ならびに訳書の頁数のみを記す。——) の「動機」ないしねらいは、本書の「序文」に簡単に明らかにされている。「この著述の動機となったもの」は、彼女が「久しい以前からその出版を準備しながら、党学校での活動やアジテーションによっていつも完成を妨げられてきた平易な国民経済学入門書」[1]であったが、そのねらいとした、「資本制的生産の総過程を、その具体的な諸連関ならびにその客観的な歴史的制限において、充分明確に叙述すること」は、しかし、実際にこれに取り組んでみると、「単に叙述上の問題」ばかりではなく、さらに根本的に、彼女にとって「思いがけない困難」を含んでいることが明らかになってき

た。その「困難」とは、「理論的にマルクスの『資本論』第二巻の内容に関連し、同時に今日の帝国主義的政策ならびにその経済的根底の実際に深くかかわる問題」であり、そして「この問題を科学的に正確に把えようとする試みに成功し」ないかぎり、積年の懸案となっていた仕事の「完成」は、とうていこれを望むべくもなかった、というのである。ルクセンブルクのこの「問題」が、それ自身、検討を要する一つの問題であることは、のちに立ち入って考察しなければならないが、しかし、ともかく彼女がここで「試み」ているのは、明らかに、一定の「理論的」基準をもってする資本主義社会の歴史的過程の総体、とくに「今日の帝国主義的政策ならびにその経済的根底の実際」についての「科学的」究明であり、そしてこれが、いまなお、われわれにその解決を迫る社会科学の根本問題であることは疑いない。だが、本書の「運命」は、決して尋常一様のものではなかった。著者みずから述べているように、それはまず、ドイツ社会民主党内の「幾多の批評家たち」の酷評に迎えられなければならなかった（Vgl. Rosa Luxemburg, *Die Akkumulation des Kapitals, oder Was die Epigonen aus der Marxschen Theorie gemacht haben, Eine Antikritik*, Leipzig 1921, S. 5-6. 宗道太訳『資本蓄積再論』〔『社会思想全集』第十四巻、一九二九年、平凡社、所収〕五七九―八〇ページ参照。――以下、引用のさいには、*Antikritik* ならびに『再論』と略す。――）。

ルクセンブルクとしては、その提起した「問題」と、これを解決する「試み」の「成功」とには、並なみならぬ自負をもっていたようであり、それだけにまた、「問題」そのものの「存在」をすら、頭から否定してかかる多くの『論評』の出現は、全く予想もしえなかったことのようである。[2] それだけではない。「現存のマルクス主義者の何人に対する論争」の書でもなく、「こと」は「錯綜した抽象的科学的な問題についての純理論的な一労

作」にかかわるものであるにもかかわらず、本書にかぎってとくに、「一政治新聞の編集局全体が立ち上って」、これに「共同的判断を下そうとする」というような、彼女の知るかぎり前代未聞の「異常」な「経過」をたどったことは、彼女のとうてい黙過しえないところであった。のちに書かれたいわゆる「練達の士たち」に対する『反批判』の論調に、かなり手厳しいものがあったのも、またやむをえないことであろう。もちろん、ここには、一部は、執筆当時の「われわれの実践的な帝国主義との闘争」（前掲『資本蓄積論』「序文」）の現状が色濃く反映しているのを見落すわけにはいかない（Vgl. *Antikritik*, S. 118ff.『再論』七三五ページ以下参照。）が、しかし、すでに『資本蓄積論』に展開された「純理論的」な内容の基本的な点に関しては、『反批判』は、これを文字通り「再度論ずる」に終っているといってよい。つまり、論難はされたが、――あるいはむしろ、「論評」が或る種の「激情（ライデンシャフト）」にかられた論難[3]でしかなかったが故に、「問題」はそのまま残ったということである。本書をめぐるこうした事情は、著者の死後においても、残念ながら、それほど大きな変化をみせてはいないように思われる。

ルクセンブルクの問題は、もともと、「帝国主義の経済学的説明のために」、あるいは「帝国主義」の「歴史的必然性」（*Antikritik*, S. 108.『再論』七二二ページ。）の「科学的」規定のために、「理論的に『資本論』第二巻の内容に関連し」て提起された問題であり、したがってそれは、『資本論』に対する単なる教条墨守の解説的研究によってこれを切り捨てるというだけでは、決して片づかない問題であった。まして、『資本論』第二巻の解説としても、はなはだ不充分なそれをもって「批評」に代えるというのでは、はじめから問題にもならないことは明らかである。ルクセンブルクが独自の「問題」提起によってその解決に迫ろうとした問題は、本書の「誤[4]

り」を突く『資本論』「通の」「批評家」に、それでは、『資本論』の第二巻のみならず、その全「理論的」「内容」との関連において、いかにして「帝国主義」の「歴史的必然性」を明らかにするかという問いを、即座に投げ返さずにはおかない。このことは、本書に対する「批評」にして、いやしくも何等かの顧慮に値する「批評」であるかぎり、それらがいずれも、単にその「誤り」の指摘にはとどまらず、進んで、「週期的」「産業循環」ないし「市場の一般的理論と恐慌」など、『資本論』の「理論的」「内容に関連する」諸問題について、また、「帝国主義の経済的基礎」にかかわる「具体的な問題」について、それぞれ、その積極的な解決を試みるものとならざるをえなかったし、また現にそうなっているという事実に徴して明らかであろう。[5] 問題は、むしろ、こうした評者それぞれの自説の展開が、ルクセンブルクの提起した問題を真に解決するというよりは、それ自身、問題のさらに困難な深部をあらためて露呈する結果になっているとみられるところにある。このことは、明らかに、「帝国主義」の「実際」の「理論的」分析においては、もはや問題の部分的な解決はありえないということを、そして、問題の全面的かつ根本的な性格は、何よりもまず、社会科学の方法の明確化を要請するものであり、これなしには、問題の解決に有効確実な進展はもはや期待しえない関係にあるということを、示しているように思われる。大胆率直な根本問題の提起者は、早くも、この点の検討に必要で充分な「関係材料」（*Antikritik*, S. 6. 『再論』五八〇ページ。）を提供しているといってよい。[6]

（1）パウル・レヴィの編集による『経済学入門』（佐野文夫訳、一九三三年、岩波文庫）は、きわめて不完全な形でではあるが、彼女の構想の一端を伝えている。本書の刊行をめぐる諸事情については、パウル・フレーリヒ『ローザ・ルクセンブルク　その思想と生涯』（伊藤成彦訳、一九六九年、東邦出版社、二〇九―一〇ページ）に明らかにされている。なお、「社会改良か革命か」（『ローザ・ルクセン

ブルク選集』〔全四巻、一九六九―七〇年、現代思潮社〕第一巻、所収）から、本書を経て『資本蓄積論』にいたるルクセンブルクの問題および研究の進展については、相原茂「ローザ・ルクセンブルク」（『経済学説全集』第八巻、相原茂編『マルクス経済学の発展』一九五六年、河出書房、第四章）に、ゆきとどいた説明がある（二〇八―一七ページ）。

(2) それは、例えば、彼女自身の次の言葉からも、うかがわれる。――「私が『蓄積論』を書いた当時、しばしば次の考えが私を苦しめた。マルクス学説を理論的興味をもって信奉するほどの人は誰でも、私がこうも立ち入って説明し、基礎づけようとしていることをもって、そんなことは、まさに自明のことだ、誰だって、もともと、そうよりほかには考えていなかった、そのような問題の解決が、一般に唯一可能なものであり、唯一考えられるものだ、と。ところが、事実はまるでちがっていた。」（*Antikritik*, S. 5.『再論』五七九ページ。）、――また、彼女がウロンケに囚われの身となっていた当時、友人ディーフェンバッハに宛てた一九一七年五月十二日付けの手紙にも、『蓄積論』執筆当時が、彼女の「生涯の最も幸せな時期に属する」ことが、印象的な筆致で書かれている（フレーリッヒ、前掲訳書、二二二ページ）。

(3) 「純理論的な一労作」に対するこうした「激情（ライデンシャフト）」は、ポール・スウィージーもふれているが（『資本主義発展の理論』都留重人訳、一九六七年、新評論社、二五六ページ）、何よりもよく、政治的党派の質を、あるいはむしろ、その変質を、物語るものといってよい。

(4) これは、ルクセンブルクに対する批評に限ったことではなく、一般に『資本論』の研究に相当に根強くあったし、また、いまでも決してないとはいえない傾向である。ただ、「教条」に対する鹵に衣を着せぬ批判者に対して、とりわけそれが強く出たというにすぎない。

(5) ルクセンブルクが、みずから反論を加えているオットー・バウアーも、その一人には数えられようが、しかし、何といっても、本格的なルクセンブルク批判の代表者は、多くの論者も認めるように（相原茂、前掲書、二四〇ページ。スウィージー、前掲訳書、二五四ページ。）、ニコライ・ブハーリン（『帝国主義と資本の蓄積』友岡久雄訳、一九二七年、同人社）であろう。だが、『資本論』の再生産過程表式論の解説という点では、たしかに、一頭地を抜きん出るものがあるとはいえ、それもまた、問題の解決というよりは、むしろ、それ自身、新たな難点を提示するものといった方がよさそうである。帝国主義に関する規定も、その一つであるが、なかでも、わが国における従来の恐慌論の研究に大きな影響を与えたとみられる「市場の一般的理論と恐慌」の章について、とくにそういえる。

(6) ルクセンブルクについては、革命的思想家としての卓越した資質と悲劇的な生涯のドラマの鮮烈さによるものであろうか、従来、「人と思想」という主題のもとに、いわゆる思想史的に、あるいは伝記的に取り扱われることが多く、この方面では、内外の研究の成果は、かなりのものになるようである。――この点については、回顧の時点は少し古くなるが、西川正雄「ローザ・ルクセンブルク解釈の流れ」（『歴史学研究』第二三九号、一九六〇年三月）に、前掲フレーリヒの評伝の巻末に訳者が付けられた文献一覧を加えてみれば、或る程度の概観を得ることができよう。――だが、『資本蓄積論』のような社会科学の根本問題にかかわるルクセンブルクの仕事という

ことになると、そうした文脈のなかでは、必ずしも充分には把えきれないものがあるのではないかと思われる。本書を高く評価する場合（フレーリヒ）でも、そうであるが、逆に、何らかの政治的な規準によって、これを「誤りの体系（ルクセンブルク主義）」の一環として論評する場合（フレット・エルスナー『ローザルクセンブルク　その生涯と業績』（杉山忠平訳、一九五五年、理論社））にはなおさら、本書に提起された問題は、充分な検討を受けないままに、かえって事実上放置されるという結果を、まぬがれえてはいないようにみえる。批評が部分的に当っていても、「誤り」の「克服」には、さらに長大な距離があるということは、『剰余価値学説史』といわず、『資本論』の各所に示されているマルクスの従来の諸学説への、まさにその深部を把えた批判の仕方をみれば、直ちに明らかであろう。ルクセンブルクに、思想史的・伝記的に、まして政治運動論として、取扱いうる面があることを否定するわけでは、もちろんないが、ルクセンブルクが究明しようとした社会科学の問題は、やはり、社会科学固有の論証（ないし実証）の問題として、批判の対象にされなければならない。いいかえれば、それは、いわば歴史的相対的な素材ないしはミクロコスモスのなかに閉じ込められたものとしてではなく、何よりもまず、社会科学の理論史に対するそれの寄与は何であり、どこにあるかという点で、言葉の厳密な意味での批判の対象にされなければならない。もとよりそれは、同時に自己への批判となってはね返ってくるものではあるが、それなしには、しかし、ルクセンブルクの問題は、普遍的なものへの、歴史的現実に科学的に迫る理論および方法への、通路を見出しえないことになろう。――なお、『資本蓄積論』を取り上げたものとしては、前掲の諸労作のほかに、モーリス・ドッブ『経済理論と社会主義』Ⅱ（都留重人他訳、一九五九年、岩波現代叢書）第十六章「資本蓄積論」、小冊子ながら、ルクセンブルクの「理論」に「焦点」を合わせたという点でユニークな、トニー・クリフ『ローザ・ルクセンブルク』（浜田泰三訳、一九六八年、現代思潮社）第八章「資本蓄積論」、および、本書に対する本格的な再評価の試みとして、向山景一「ローザ『蓄積論』の現代的意義」（『ローザ・ルクセンブルク論集』、一九七〇年、情報出版、所収）を挙げておかなければならない。

一

本書は、第一篇「再生産の問題」、第二篇「問題の歴史的叙述」および第三篇「蓄積の歴史的諸条件」の三篇三十二章より成るかなりの大冊であるが、帝国主義の「実際」の歴史的過程の分析視角を規定する理論的基礎と

なるものについてみるかぎり、その骨子は、わずかに次の数章の展開のうちに、ほぼ論じつくされているとみてよい。すなわち、マルクスの拡大再生産表式の「困難」ないし「諸矛盾」をさまざまな角度から追求しつつ、「問題」の所在およびその解決の手がかりを明らかにしようとする第一篇の終りの三章および第三篇第二十五章と、「問題」の積極的解決を与えようとする第三篇第二十六章「資本の再生産とその環境」と、これである。[1] これらの章に展開されている本書の主題は、すでに序章「研究の対象」のなかにあらわれてくる「資本の支配のもとでの拡大再生産」の「一般的抽象的範式」(S.13-14. 上、二二—二三ページ。) および「この範式の現実化に必要な具体的諸条件」の「考察」(S. 14. 二三ページ。) という特徴的な課題の立て方に、要約的に表現されているといってよい。以下では、まず、主としてこれらの章によって、ルクセンブルクの所説を検討することにしたい。第三篇のその他の諸章で、彼女が「帝国主義段階」の「矛盾に充ちた運動」の諸相を叙述し、またとくに、周知の「資本主義の崩壊」の「必然性」(S.393. 下、五〇一ページ。) に論及している点については、上記の諸章に明らかにされている「蓄積運動」の基本的規定との関連において、のちに取り上げることにする。

ルクセンブルクは、マルクスによる「蓄積の表式的説明」(『資本論』第二巻第三篇第二十一章) について、次のように「分析」する。まず、「厳密」「正確な規則に表現される」(S.99-100. 上、一二六ページ。) 第一部門 (生産手段生産部門) と第二部門 (消費資料生産部門) とにおける「蓄積の相互依存性」には、明らかに、「独自の性質」(S.92. 一一七ページ。) がある。すなわち、「全蓄積運動は、第一部門によって開始されて能動的におこなわれ、第二部門はこれに受動的に参加する」(S.99. 一二五—六ページ。)。もちろん、「独自の性質」を云々する

からには、そこに、基準となる「一般的な観点」（S.103.一三〇ページ。）がなければならない。ルクセンブルクの場合それは、「生活手段の生産」が「自己目的」（S.106.一三三ページ。）となり、したがって、「事態」が「第二部門から把えられなければならない」「一つの社会主義社会」（S.102.一二九ページ。）、「労働する者とその欲望の充足とが経済体制の基礎をなす一社会」（S.106.一三三ページ。）の「観点」だということになる。こうした理解そのものが、すでに一つの問題であるが、その点の検討は、しばらくのちのことにしよう。ともかく、彼女にとって「問題」は、「資本制的蓄積の厳密な規則が、事実上の諸関係と一致しているかどうか」（S.100.一二六ページ。）という点に、いいかえれば、「資本制的経済に対する表式の妥当性」（S.103.一三〇ページ。）にある。

ルクセンブルクの主張によれば、この「問題」の「吟味」にあたって、「何よりもまず、蓄積のための出発点は何かということを問う」「見地から、両生産部門における蓄積過程の相互依存性を追求」すれば、「マルクスの表式」の限界は、直ちに明らかになる。「マルクスの表式によると」、一見、その「一般的規則」に表現される「諸条件さえ厳守されれば」、あたかも、「両部門における蓄積が事実上もまた進行し、かつ、年々全く自動的に遂行される」かのように「見える」が、しかし、「事実」は「決してそうはならない」。こうした「蓄積の諸条件は、まさに、それなくしては蓄積がおこなわれえないという諸条件にすぎない」。「蓄積の意志および技術的な諸前提条件だけでは、資本制的商品経済においては不充分であ」り、「事実上蓄積がおこなわれるためには、すなわち生産が拡大されるためには、さらに他の一条件が、すなわち、諸商品に対する支払能力ある需要の拡大が、必要である」（S.103-4.一三〇-一ページ。）、というのである。つまり、ルクセンブルクにとっては、蓄積のいわば充分条件は何かということが「問題」だったのであり、そこで「問題」は、あらためて次のように提起さ

れることになる。すなわち、「マルクスの表式における生産の累進的拡大の根底にある絶えず増大する需要はどこから生ずるか」(S.104. 一三一ページ。)、と。この問いこそ、以下においてさまざまな形でくりかえし提起されては、執拗にその解決が追求されていく本書のライトモチーフであるといってよい。もっぱらこのような見地から、彼女は続いて、マルクスの拡大再生産表式に対する全面的な批判にとりかかるのである。

ルクセンブルクはいう、「剰余価値の一部分を資本家階級はみずから生活手段の姿態で消費し、そしてこれに対して相互に交換した貨幣を自分のポケットに保持する。だが、剰余価値のうち資本化される他の部分が体化されている生産物を資本家階級から買い取る者は誰か。」「マルクスの表式によれば、運動は第一部門から、生産手段の生産から、出発する」のであるから、これに対する「表式」の「答え」は、次のようなものでなければならない。すなわち、「一部分は、資本家みずからこれを買い取って、生産の拡大のために新たな生産手段を作り、一部分は、この新たな生産手段の充用のために必要な新たな労働者が、これを買い取る」、と。ルクセンブルクにいわせれば、しかし、これは「明らかにどうどうめぐり」であり、「単により多くの労働者を維持しうるというためにのみ、より多くの消費手段を生産し、また単により多くの労働者を働らかせるためにのみ、より多くの生産手段を生産するということは、資本制的観点からすれば不合理なことである」。「新たな労働者を新たな生産手段で労働させるためには、――資本制的には――あらかじめ、生産の拡大のための目的が、製作されるべき生産物に対する新たな需要が、なければならない」(S.104-5. 一三一―三ページ。)、というのである。

いわゆる「運動」の「出発点」ないし「資本制的」「生産の拡大の目的」なるものの強調に、すでにルクセンブルク独自の見地があらわれており、のちに本書の全体としての理論的内容の検討にさいして、われわれはこの点

に立ち帰らなければならないが、さしあたりここでは、彼女がその「問い」に対する「マルクスの表式」の「答え」として理解しているものについて、次の点を指摘しておこう。――「剰余価値のうち資本化される部分」の「一部分」は、たしかに、「マルクスの表式」においても、「資本家みずからこれを買い取る」にはちがいないが、しかし、そのことは、彼女の解するように、直ちに「生産の拡大のために新たな生産手段を作る」ということではない。両部門の資本家が、それぞれ、次年度の「生産の拡大」のために要する追加的生産手段を、さきの剰余生産物「部分」のなかから「買い取る」ということであり、しかも、それは単に両部門の資本家相互間の交換によってのみおこなわれるものではない。いうまでもなく、第二部門の資本家は、第一部門において――追加的生産手段をもって――追加的に雇傭される労働者の賃金の支出によるその剰余生産物の一部分の販売を通して、またそのかぎりにおいてのみ、「新たな生産手段」を得ることができる。ほかならぬこの第二部門の剰余生産物部分を、第一部門における蓄積の結果としてさらに増産される「新たな生産手段の充用のために必要な」さらに多くの「新たな労働者が買い取る」などという関係は、「マルクスの表式」に関するかぎり、そのどこにも存在しない。「資本制的」「生産の拡大の目的」たる「製作されるべき生産物に対する新たな需要」はそもそも「どこから生ずるか」という「問題」は、だから、「マルクスの表式」そのものとは実は何の関係もないルクセンブルク独自の「再生産の問題」にほかならない。[2] 議論の進むにつれて、この点はいよいよ判然としてくる。

ルクセンブルクは、「人口の自然増加」(S.105ff. 一三三ページ以下。)、「対外商業」[3] (S.108-9. 一三六-七ページ。)を順次検討し、これらはいずれも「困難」の解決には役に立たないとして、さらに「事柄をなお他の一面から考察」(S.109. 一三七ページ。)する。「社会的剰余価値のうち蓄積されるべき部分は、最初からそれが蓄積に使用さ

れることを条件づけかつ許すところの現物形態で出現するということ」が、「マルクスの蓄積表式」の「前提」であるが、しかし、「ここに仮定された経過は、資本制的商品生産の基礎と矛盾する」。というのは、こうである。――「剰余価値は、いかなる現物姿態に含まれていようとも、直接、蓄積のために生産場所に移譲されうるものではなく、それはまず実現され、貨幣に交換されなければならない」[4]、いいかえれば、「剰余価値は、再び生産資本に追加される前に、まずその現物姿態を脱ぎ捨てて、その純粋な価値姿態をとらなければならない。それは、各個別資本家に関連するが、しかしまた社会的総資本家にも当てはまる、というのは、剰余価値の純粋な価値姿態への実現は、資本制的生産の根本条件の一つだからである」。「だが」、――と彼女は「問題」の核心に入る、――「だが、第一部門および第二部門の剰余生産物を買い取るのは何であり誰であるか」。これに対して彼女は、「剰余価値が貨幣に転形される」ためには、右の両部門「の外部に一つの販路が現存しなければならない」と論じ、続いて、次の叙述をもって第七章「マルクスの拡大再生産表式の分析」を結ぶ。すなわち、「この実現された剰余価値がまた生産の拡大に、蓄積に、使用されうるためには、やはり第一部門および第二部門の外部にあるさらにより大きな将来の販路の見込みが必要である。かくして、剰余生産物に対するこの販路は、毎年、剰余価値の蓄積される割合だけ増大しなければならない。あるいは逆に、蓄積は、第一部門および第二部門の外部の販路が増大する程度においてのみ、おこなわれうる」（S.109-10.一三七-八ページ。）、と。

さて、この「分析」についてみるに、まず、「蓄積されるべき」剰余価値「部分」は、「まず貨幣に」、「その純粋な価値恣態」に、「実現されなければならない」ということ、そのこと自身は、「マルクスの蓄積表式」に対する批判としては、明らかに的を外れている。ルクセンブルクが強調する、問題の剰余価値「部分」の運動、

すなわち、「まず実現され」、ついで「再び生産資本に追加される」運動は、「マルクスの蓄積表式」に叙述されているところの、商品生産物を起点とする社会的総資本の価値＝および素材補塡の運動のうちに、すでに全く包含されている。この点には、またのちに立ち帰る。ところが、ほかならぬ「マルクスの蓄積表式」に対する批判点としてルクセンブルクが挙げる「剰余価値の実現」の「問題」なるものは、実は、はじめから、「表式的」に「説明」されているかぎりでの剰余価値部分の運動にあるのではなかった。つまり、彼女にとって「問題」は、社会的商品生産物の一定の価値＝および素材補塡の「経過」を「仮定」する――と、彼女のみる――「表式」の『前提』そのものにあったのであり、別のところで彼女が、はっきりと述べているように、「蓄積、すなわち剰余価値の一部分の資本化という条件のもとでは、資本家階級がみずからその全剰余価値を買い取り、実現することはできない」(S.136-7. 一七一-二ページ。)というところに、「資本制的経済の死活問題」(S.141. 一七八ページ。)があったのである。一旦この「出発点」さえ与えられれば、ルクセンブルクの「蓄積運動」の特徴的な全「経過」は、もはや手にとるように明らかである。「マルクスの拡大再生産表式の分析」の結論にみられる通り、「第一部門および第二部門の外部」で「実現された剰余価値がまた生産の拡大に、蓄積に、使用されうるため」の条件は何かということが、いいかえれば、この「生産の拡大」、「蓄積」、の結果としてさらに生ずる「追加生産物」(S.119. 一四九ページ。)中の「資本化される」剰余価値ないし剰余生産物「部分」に対する「さらにより大きな将来の販路の見込み」はいかにして確保されるかということが、「問題」の一切である。ここにみられるのは、だから、「資本家階級」を強制して、「毎年、剰余価値の蓄積される割合だけ増大しなければならない」「剰余生産物に対する販路」の「増大」を、つまり、「資本化の目的のための剰余価値の実現」(S.141. 一七八ページ。)

を、不断に追求せしめる一個同一の『無限進行』の過程である。はじめにふれたルクセンブルクの、資本蓄積に関する「一般的抽象的範式」は、最も簡にして要を得た、過程の表現にほかならない。すなわち、それは、「以前の生産期間に取得された剰余価値のうち資本化される部分」を$\frac{m}{x}$で、「増大した資本から新たに生み出される剰余価値」をm′で「表わし」て、——

$$(c+v)+\frac{m}{x}+m'$$

と定式化されている。彼女が力説してやまない、「蓄積運動を、流動の只中において、すでに高度な発展段階において、把える」（S. 96,121-2. 一二一、一五三ページ。）とは、畢竟、このことであった。

ルクセンブルクのこうした見地からすれば、「蓄積の表式的説明」における「貨幣流通」の取り扱い方が、また、さかのぼって、マルクスの「剰余価値の流通」（『資本論』第二巻第二篇第十七章）の考察が、全く不満足なものと映るのは当然である。彼女が、「蓄積の表式的説明」そのもののなかに、そもそも存在していないことをみずから明らかにしている「問題」について、その「解決の試み」をそこに探し求めるのは、いよいよ無益であり、また、「貨幣流通」および「剰余価値の流通」に関するマルクスの所説に、「問題提起そのもの」の「間違い」（S. 119,136. 一四九、一七一ページ。）を、したがってまた、徒らに人を「悪循環」に駆りたてる「退屈な廻り道」（S. 136-7. 一七一-二ページ。）をのみ見出すとすれば、これに対する彼女の批評そのものがまた「退屈な廻り道」になるのも、やむをえない。事実、第一篇の終りの二章でのルクセンブルクの議論には、自己の主題の展開としては、ほとんどみるべきものがないといってよい。むしろそれは、はからずも『資本論』第二巻の理論的諸

規定そのものについての彼女の理解の不充分さを示すものとなっているが、この点は、のちにその所説を全体として検討するさいにふれることにする。ともかくルクセンブルクは、以上のような「再生産の問題」の提起をもって、「マルクス以前ならびに以後の」諸学説の包括的批判をおこなってから、第三篇の最初の章で、「拡大再生産表式の諸矛盾」を総括する。次にこれをみよう。

(1) 本書の「研究の要旨」が、ほぼ同じ諸章に「展開されている」ことは、すでに相原氏が指摘されている（前掲書、二二七ページ）。

(2) さきに『資本論』第二巻の解説にのみよるのでは片づかない「問題」といったのは、一つには、この点である。――なお、いわゆる近代経済学の一部から、この「問題」に対して独特の評価がおこなわれている点については、前掲の相原論文、二四一ページ、ドッブ、前掲訳書、一七七ページ、および、クリフの前掲邦訳に収録されているラーヤ・ドゥナエフスカヤ論文、同訳書、一六五―六ページ、を参照されたい。

(3) この点は、しかし、あまり明確ではない。彼女は、のちに、通常理解されるところとは全く別の、独特の「内部的および対外的販売市場の概念」(*Akkumulation*, S. 338.『蓄積論』下、四三二ページ。)を明らかにするのであるが、事柄は、これによっても少しも変らない。

(4) 当然のことだが、ルクセンブルクは、「ここでは、生産物、例えば、炭抗における石炭、の一部分が、交換なしに直接に再び生産過程に入りうる場合を度外視する」と註記している（S. 109. 上、一三八ページ。）。――「社会的総資本の再生産と流通」（『資本論』第二巻第三篇）の本性を明らかにするために、われわれは、むしろ逆に、ルクセンブルクに対して、「例外的」（*Ebd.* 同上）にもせよ、そういうことが「ありうる場合」を、強調しさえしなければならないであろう。この点は、のちに。

二

すでにみたルクセンブルクの「表式」批判の論点の、単なるくりかえしとみられるもの、および、彼女が、――したがってまたわれわれが、――のちに立ち入って吟味する『資本論』の方法論的「前提」への、ここでの関説を別とすれば、本節で主に確認しなければならないのは、次のことである。すなわち、ルクセンブルクが、「マルクスがその全著作、ことに〔『資本論』〕第三巻において、きわめて詳細かつ明白に書いている」「資本

制的蓄積の特徴的経過についての彼の見解」――といっても、それは彼女の理解するかぎりでのそれであることは、いうまでもないが、その「見解」――に照らして、『資本論』「第二巻の結びの表式の不充分なところ」を、いいかえれば、「表式」が「マルクスの理論と多くの点で矛盾する」（S.305. 下、三九一ページ。）ゆえんを、ほぼ三点にわたって論じている内容、これである。ここでルクセンブルクが、マルクスの「表式」とその「一般的見解」とのあいだに諸々の「矛盾」を発見し、しかも後者を採って前者を斥けるということが、逆に、それ自身、『資本論』「第二巻の結びの表式」のみならずその全三巻の諸規定に対する彼女の理解を、新たな角度から照らし出すことになるのは、以下にみる通りである。まず、第一の点から。

（1）ルクセンブルクによれば、「何よりもまず表式は、労働生産性の進歩を顧慮していない。いいかえれば、それは蓄積にもかかわらず毎年同じ資本構成を、すなわち生産過程の同じ技術的基礎を、前提している」。「資本蓄積の過程に平行して進み、かつこれと不可分離である技術の変化」は、いかにも、「分析を簡単にするためには、全く差支えないことである」が、しかし、「社会的総生産物の実現および再生産の具体的諸条件を研究するさいには」、それは「顧慮され計算に入れられなければならない」。ところで、「社会的生産物――生産手段ならびに消費手段――の物的分量」の「増大」は、「他面」では、「資本構成」の高度化ならびに「剰余価値率」の相対的増進にほかならない。そこで、こうした諸変化を「一般的かつ週期的現象として顧慮し」て、「これに応じて表式を補足すれば」、次のことが分る。すなわち、そこでは、「毎年、生産手段の不足の増大と消費手段の過剰の増大とが生ずるにちがいない」、いいかえれば、そこには、「社会的生産物の物的構成と価値構成との

あいだの〔文字通り――引用者〕不均衡」があらわれるということ、これである（S.305-7.三九一-三ページ。）。この点を「確証」すべく、彼女はさらに、マルクスの表式「第二例」に、「資本構成」ならびに「剰余価値率」の諸変化を「仮定し」て、独特の「表式」を掲げる（S.307.三九三-四ページ。）。そして、数字の上での「生産手段」の累進的「不足」と「消費手段」の累進的「過剰」とが、何よりも雄弁に「第二巻の結びの表式の不充分なこと」を、つまり、「第二部門に比べての第一部門のより急速な増大は、マルクスの表式の諸連関の内部では絶対に達成されえない」（S.311.三九九ページ。）ことを、証明するというのであるが、しかし、ルクセンブルクのこの「表式」こそ、まさに恣意的な「紙上の運算」以外の何ものでもないことは明らかである。この「表式」によれば、「蓄積」は、「生産手段の不足」と「消費手段の過剰」とが累進的に「増大」するにもかかわらず、「第二」、「第三」、「第四年度」と「進行する」かのように叙述されるのであるが、まことに奇妙なこの「蓄積」は、何よりもまず、あらかじめこういう「結果」を生ずるように採られた彼女の「仮定」の恣意性を「確証」する。すなわち、彼女は何と、他の一切の「仮定」を変えながら、「第二部門」だけでは「別とし」て、この部門の資本家をして「第一年度に、マルクスの仮定にしたがって」その剰余価値からの「資本化」をおこなわせている（S.307.三九三ページ。）のである。「運算」の「結果」は当然である。

ところで、ルクセンブルクがこの「表式」の「結果」について種々加えている反省（S.308-9.三九四-六ページ。）にいたっては、さらに混乱しているというほかはない。妙なことに、そこには、「労働の生産性が上昇する結果」として「充分な分量の生産手段が得られる」のに、なお「価値不足」を問題にしなければならない資本家が登場したりする（S.308.三九四ページ。）のであるが、それはともかく、ここで確認を急がなければならないのは、

彼女がこうした「マルクスの表式の吟味によってもっぱら例証し」ようとした主要点である。「蓄積の進行における生産様式の技術的変化」は、「マルクスの表式の基本的な諸連関を支離滅裂にすることなしには、自己を貫徹しえない」(S.311.三九九ページ。）という結論が、すなわちそれであるが、もう少し、彼女の説明を聞こう。「蓄積およびその技術的基礎の進展につれて、社会によって間断なく、資本化されるべき剰余価値のより大きな部分が、消費手段部門にではなく、生産手段部門に投下されるという仮定」は、「ただ、われわれが資本化されるべき剰余価値を価値量として注目するかぎりでのみ可能なのである」（S.311.三九八ページ。）が、「マルクスの表式の資本家たち」（S. 309. 三九六ページ。）は、しかし、「剰余価値のこの部分」について、「直接に資本化されるべき一定の物的姿態に縛りつけられている」（S.311.三九八ページ。）。いいかえれば、「資本化されるべき剰余価値の不変資本と可変資本とへの、その時どきの分割、ならびに、追加的な生産手段および消費手段（労働者の）の第一部門および第二部門への分割は、あらかじめ、表式の両部門の物的＝および価値的諸連関によって規定され、与えられている。だが、この物的＝および価値的諸連関は、それ自身すでに、生産の或る全く規定された技術的姿態を表現する。ということは、マルクスの表式の諸前提のもとでの蓄積の継続にさいしては、その時どきに与えられた生産の技術が、あらかじめすでに、拡大再生産のその後の諸期間の技術を規定するということを意味する」（S.310.三九七ページ。）、こういうのである。

「マルクスの表式の諸前提のものでは」、「技術の進歩」は、それが「第二部門に比べての第一部門のより急速な増大」としてあらわれるというかぎりでは、[1] たしかに、そのまま表現されてはいない。だが、このことは、何も「その時どきに与えられた生産の技術が、あらかじめすでに、……その後の……技術を規定するということ

を意味する」わけではない。のちにみるように、「マルクスの表式」は、何よりもまず、「蓄積の進行」が、したがってまた、これに伴なう「技術の進歩」にしても、それが、まさに、両部門の剰余価値部分の「物的＝および価値的諸連関によって」「厳密に規定されて」はじめておこなわれるということを、あらゆる社会に共通な再生産の拡大のための物質的基礎の資本家社会的規定として、明らかにするものである。だが、さしあたりここで、充分注目しておかなければならないのは、以上に示されたルクセンブルクの見地の特徴的な点、すなわち、「マルクスの表式の資本家たち」を、「はじめから彼等の剰余価値の物的姿態に縛りつけられている」(S.309.三九六ページ。)まことに不自由な存在とのみ表象する彼女の、ほとんど先入主ともいえる見地である。ルクセンブルクの「資本家たち」が、では、いかにしてこうした「束縛」から脱するかは、次節でみることにしよう。彼女のみるところでは、「マルクスの表式の資本家たち」のこうした「束縛」は、直ちに「拡大再生産表式の諸矛盾」の第二点を明らかにする。

(2) ルクセンブルクはいう、「投資口を求めつつある資本としての、貨幣形態での剰余価値の形成および蓄蔵」は、「その時どきに資本化される剰余価値」が、その「現物形態」に対応して、「次の生産期間に、直接にかつ残りなく生産に入り込む」とする「マルクスの表式」の「前提」そのものによって、「除外されている」(S.311-2.三九九ページ。)、と。ここで彼女が、「個別資本については」、「マルクス自身は」、固定資本の償却資金および蓄積のための準備金を「その時どきに自由な資本の貨幣形態と考えている」とするのも、かなり乱暴な解釈であるが、この「貨幣姿態にある自由な資本の両源泉は、総資本の見地からは問題にならない」(S.312.三

九九ページ。）、と片づけているのは、さらに荒っぽい。その理由というのは、せんじつめると、一般的な貨幣蓄蔵は不可能だ、という点にあるようであるが、これでは、折角のマルクスの再生産過程表式論における「貨幣流通」の分析は、だいなしにされてしまう。この点はまたのちに立ち帰るとして、とりあえずここでは、ルクセンブルクがともかくこうした理解に立って明らかにしようとする「表式」の「矛盾」とはいかなるものか、これをみておこう。――彼女の主張によれば、「表式は」、以上の点からも、「生産の突発的拡大を除外している。生産はただ、剰余価値の形成と精確に歩調を合わせ、かつ剰余価値の実現と資本化との同一性に立脚するところの、恒常的拡大をのみ許す」。また、「同じ理由から、表式は、両部門で、したがって資本制的生産の諸部門全体で均等におこなわれる蓄積を想定する。販路の飛躍的な拡大は、ここでは、他の諸部門に遙かに先んずる個々の資本制的生産部門の一面的発展と全く同様に、除外されているようにみえる」（S.313.四〇一ページ。）。――みられる通り、「表式」における社会的生産の二大部門への分割の意義は、ここでは全く没却されて、これが直ちに、「資本制的生産の諸部門全体」に対する「個々の」諸資本の投資ないし追加投資の競争の問題に、短絡されている。この点は、しかし、ルクセンブルクの「問題」およびその「解決」の方向の基本的性格にかかわることであり、立ち入った検討は、しばらくのちにゆずるほかはない。彼女は続いて、「表式」の「矛盾」を次のように要約する。「表式は」、「一方では全生産場面の週期的な飛躍的膨脹」、「他方では種々の生産部門のきわめて不均等な発展」という「二つの事実によって特徴づけられる」ところの、「資本制的生産様式の歴史」、あるいは、「資本制的発展の事実上の経過と、矛盾する」（S.313.四〇一ページ。）、と。いわゆる「資本制的発展の事実上の経過」と「マルクスの表式の見地」（*Ebd.* 同上。）とのあいだに、もっぱら二者択一的な「矛盾」をのみ見出

し、そして、「一見して」（*Ebd.* 同上。）明らかな前者の「経過」を採って後者の「見地」を棄てるルクセンブルクの「見地」は、きわめて特徴的である。彼女が「最後に」、『資本論』第三巻の「資本制的総過程およびその経過に関する」マルクスの「見解」を挙げて、「表式」の「矛盾」を突いていくのは、そうした彼女の「見地」の――「事実上の」だけではなく――理論的な補強を、マルクスその人に求めようとするものである。

(3) ここでのマルクスの「見解の根本思想は」、ルクセンブルクの解するところでは、「生産力の無制限な膨脹能力と、資本制的分配諸関係のもとでの社会の消費の制限された膨脹能力とのあいだの、内在的な矛盾である」(S.313. 四〇一ページ。)。『資本論』第三巻第三篇第十五章「法則の内的矛盾の展開」第一節「概説」で、マルクスが「詳細に叙述しているところ」は、その何よりの証拠であるとして、彼女は、周知の、「直接的搾取の諸条件とその実現の諸条件とは同一ではない」という一節を含むその「叙述」（これは、以下の箇所である。――『資本論』第三巻、長谷部文雄訳、青木文庫版〔以下「青」と略す〕(9)三五四―六ページ。向坂逸郎訳、岩波文庫版〔以下「岩」と略す〕(8)三八五―七ページ。）を、前後二、三頁にわたって引用する（S.313-5.四〇一-四ページ。）のであるが、われわれに興味があるのは、彼女がこの「叙述」を典拠として「表式」に下そうとする次のような断罪である。少し長くなるが、彼女の特徴的な見地をよく表わしているので、引用してみよう。――

「この叙述を拡大再生産の表式と較べてみれば、両者は全く一致しない。表式によれば、剰余価値の生産とその実現とのあいだには、全く何の内在的矛盾もなく、むしろ内在的同一性がある。剰余価値は、ここでは、はじめから、もっぱら蓄積のために算定された現物姿態で出現する。それは追加資本としてすでに生産場所から出てくる。その実現可能性はそれで与えられ

ている、すなわち、資本家たち自身の蓄積衝動のうちに、与えられている。資本家たちは、階級として、彼らの取得した剰余価値を、あらかじめもっぱら、蓄積を進めるためにそれを使用することを可能にしかつ条件づける物的姿態で、生産させるのである。剰余価値の実現とその蓄積とは、ここでは、一個同一の経過の二つの側面にすぎず、概念的に同一である。だからまた、表式に表わされているような再生産の過程にとっては、社会の消費力は何らの生産の制限でもない。ここでは、生産の拡大は、社会の消費力がその『敵対的な分配諸関係』を超えることなしに、毎年自動的に進展する。拡大の、蓄積の、この自動的進展は、なるほど、『資本制的生産にとっての法則――没落の刑罰のもとでの』である。しかし、第三巻における分析にしたがえば、『だから市場はたえず拡張されなければならない』のであり、『市場』は明らかに資本家と労働者との消費をこえて拡張されなければならない。」（S.315-6.四〇四ページ。）

これに直ぐ続けてルクセンブルクは、彼女の引用した「マルクスの命題」、『内的矛盾は生産の外的場面の拡張によって均衡をえようとする』に、『生産の外的場面』とあるのは、――ツガン・バラノフスキーが「解釈する」ように「生産そのものを意味」するようなものでは決してなく、――「全く明白に、『たえず拡張されなければならない』消費のことである」（S.316.四〇四-五ページ。）、と断定するのである。だが、引用されたマルクスの「叙述」は、ルクセンブルク独自の「表式」批判の見地を確証するに役立つものではない。

もともと、このマルクスの「叙述」自身、ここで、ことのついでに取扱うには余りに大きな問題を含むものであるが、しかしそれにしても、その「叙述」が単に、「蓄積衝動」による資本家の個人的「消費」の制限と、労働者の狭隘な「消費力」とによる「剰余価値の実現」の困難一般を、まして、ルクセンブルクのいわゆる「資本家と労働者との消費を超えて市場をたえず拡張する必然性」（S.317.四〇六ページ。）などを説くものではないとい

うことは、明らかである。そこでは、たしかに、「剰余価値が生産される諸条件と、それが実現される諸条件とのあいだの矛盾」が、或いは同じことだが、「生産力」の「発展」と、「消費諸関係の立脚する狭隘な基礎」との「矛盾」が、語られている。だが、それは、「資本の過多が、人口の過多の増大と結びついている」「矛盾に充ちた基礎」として論じられているのであって、きわめて難解ながら、そこには、不況期の資本の蓄積過程が、全体としてこの過程を実現する個々の諸資本の投資の競争の場面にあらわれる諸形態の「叙述」としてこれを把え直す余地が、なお多分に残されているとみられるのである。この点は、一般に、再生産論と利潤論とはいかなる関係にあるかという問題にかかわることであり、そのようなものとして、のちにルクセンブルクの所説の総括的検討のさいにふれることにしよう。ここでは、マルクスの「叙述」についての彼女の右のような「解釈」に関連して、とりあえず次の点を指摘しておく。――個別的諸資本の競争は、一般的には、ますます大きな資本による超過利潤の獲得を目標とし動機とする運動として展開されるのであるが、不況期における「資本の過多」のもとでは、それは特有の「自然法則の姿態をとって」あらわれる。ここでの「資本の過多」は、個々の資本家にとっては、たしかに、「搾り取られた剰余価値が全部または部分的にしか実現されないこともあり、それどころか彼の〔資本家の〕資本が部分的または全部的に失われることもありうる」諸商品の全面的な実現難としてあらわれるのであるが、「もはや利潤の分配ではなく損失の分配が問題となる」（『資本論』第三巻、青(9)三六七ページ、岩(8)三九九ページ。）こうした不況期の熾烈な競争戦は、必ず、個々の資本を、「単に自己保存手段として、また没落の刑罰のもとで、生産を改良し生産の規模を拡張する必然性」のもとにおき、かくして強制されるその「蓄積衝動」を通して、全体として、資本の構成の高度化を伴う蓄積過程を実現する。ほかならぬこの過程が、同時

に、「人口の過多の増大」を生ぜしめるとともに、「社会の消費力」に一定の――まさに「敵対的な」――「制限」を画することになるのであって、マルクスのいわゆる「剰余価値が生産される諸条件と、それが実現される諸条件とのあいだの矛盾」とは、こうした、「資本の過多が人口の過多の増大と結びついている」不況期の資本の蓄積過程が、これを実現する資本家的競争の機構の担い手たちの意識、表象に反映する「矛盾」の特有の形態を規定するものと考えられる。そこではまさに、「剰余価値の実現の諸条件」、あるいは、「市場の諸関連とこれを規制する諸条件とは、ますます、生産者から独立した自然法則の姿態をとるようになり、ますます制御されえなくなる」ものとしてあらわれるのである。――従来、マルクスの恐慌論の諸規定の一つとして問題にされてきたこの「叙述」は、週期的恐慌の原因を規定するものというよりは、むしろこれを、同じ第十五章のその他の諸節での論述とともに、右に簡単に指摘したような、不況期の資本の蓄積過程の一定の資本家的意識形態ないし表象様式についての「叙述」としてみれば、きわめて示唆に富む内容を含んでいるとみられる。問題は、マルクスにあっては、好況期の蓄積が、比較的短かい、したがって取るに足らない、生産方法の不断の改善の過程の「中間休止期」（『資本論』第一巻、青(4)九七六ページ、岩(三)二〇六ページ。）として把えられる傾向が強いのに対応して、一般に資本の蓄積過程およびいわゆる「内的矛盾の展開」過程の議論が、一種の万年不況論として展開されているとみられるところにあるが、それはしかし、おのずからまた別の問題である。(2)

ところで、以上簡単に指摘したような点は、ルクセンブルクにとっては、はじめから全く無縁な問題であった。自説の理論的典拠として挙げる『資本論』第三巻の「根本思想」は、もっぱら、「資本家と労働者との消費を超えて市場をたえず拡張する必然性」を規定するという意味での「剰余価値の生産とその実現と」のあいだの、さ

らには「剰余価値の実現とその蓄積と」のあいだの「矛盾」であり、つまりは、「資本主義社会の生産能力と消費能力とのあいだの深い根本的な衝突」（S.317.四〇六ページ。）ということであった。牢固として抜きがたい強烈な彼女の「問題」意識は、マルクスが与えている、競争場裡の資本家の見地にあらわれる「内的矛盾の展開」された諸形態そのものについての「叙述」にのみ高い評価を下す。みずから引用するその「叙述」のなかで言及されている、「過多」な「資本」と「過多」な「人口」との「結合」を「制限」する、それらの形態の基礎過程との連関と、それにもましてこの基礎過程そのものの諸関係とは、最初から彼女の視野のなかには入りようもなかったようである。このことは、彼女が「表式的」に「説明」される蓄積の「経過」を、「内在的矛盾」の欠如を理由に切り捨てることと、決して無関係ではない。彼女の理解するような「内在的矛盾」は、たしかに、「表式」にはない。だからといってしかし、その「経過」には「全く何の内在的矛盾もない」ということにはならない。のちにみるように、恐慌によって転換される好況と不況との週期的交替としておこなわれる資本の蓄積過程、および社会的総資本の再生産と流通は、まさに資本の再生産過程一般に「内在」する「矛盾」の運動諸形態にほかならない。そうした諸過程は、ただ、資本家みずからこれを実現しながら決してこれをそのままには意識しえない資本主義社会の基礎過程の諸法則であるというにすぎない。こうして、一旦これらの法則を惜し気もなく切り棄ててしまえば、ルクセンブルクの最後の典拠は、端的に、さきにもみた「資本制的生産様式の歴史」上の「諸事実」にゆきつかざるをえないことになる。事実、彼女は本書の第二十六章を中心に以下の諸章で、こうした方向に沿って、「問題」の解決を追求していくのである。

（1）これは、もちろん、諸商品の価値関係ないし資本の価値構成としては、ということである。価値関係、資本の価値構成に変化がなくても、労働の生産力の変動とともに、諸商品の使用価値量に、したがってまた、資本の技術的構成に、変化が生じうることはいうまでもない。

（2）この点は、統一的には容易に理解しがたい形で『資本論』および『剰余価値学説史』の各所に見出される、マルクスの週期的恐慌に関する諸規定のすべてにかかわってくることであり、本文にも指摘した通り、倉皇のうちに取り上げて何とか片がつくという問題ではない。ただ、さきの『資本論』の箇所については、――あるいは、この箇所についても、といった方がよいかもしれないが、それはともかく、――宇野弘蔵氏が、すでに鋭い理解を明らかにされているので、この点に限って、一言ふれておきたい。――氏は、その『恐慌論』（一九五三年、岩波書店）のなかで、「マルクスの所謂『直接的搾取の諸条件とこの搾取の実現の諸条件とは同一ではない』という規定」は、「好況期における投機」が、「販売し得ない商品在荷の形態によって、資本の労働に対する基本的関係を隠蔽し、歪曲して表現する」という「関係を基礎にするものではないか」と説かれ、さらに、同書の附録に収められている論文「『資本論』における恐慌の必然的根拠の論証について」の参照を求められている（九六―七ページ）。週期的恐慌の基本的規定との一定の（同書、序論、三「恐慌現象における商業資本の役割」参照）関連において、氏が論及されているこうした、「実際上は商業資本、特に商人資本の投機の介入によって、過剰資本がその在荷等に隠蔽せられ」（二一七ページ）る「関係」それ自身は、たしかに、「恐慌の必然的根拠の論証」に――逆の面からではあるが――補足的に論及されなければならない重要な一規定であるといってよいであろう。だが、『資本論』のこの箇所については、氏はこれを、――その点では従来の恐慌論の場合と同様、――あくまでも「恐慌の原因」（二一四ページ）を規定するものとして問題にされ、種々検討を加えておられるようにみえる。本文でも簡単にふれたように、そういう理解は、『資本論』のこの箇所に関するかぎり、少し無理なのではなかろうか。もちろん、恐慌論における氏の積極的な諸規定の展開が、直接これによってどうにかなるというわけのものではない。それが、恐慌論の研究に、もって確実な基礎となしうるきわめて重要な諸点を明らかにするものであるということは、いまさら喋々するまでもない。本文に示したような理解自身、これに負うものである。

三

「マルクスの拡大再生産表式は」、とルクセンブルクはいまや断定する、「蓄積の過程を、それが現実に進行し、かつ歴史的に自己を貫徹するままに、われわれに説明することはできない。それはどこからくるか。ほかで

もない、表式そのものの諸前提からである」(S.318. 四〇七ページ。)。――「蓄積」の「現実」的かつ「歴史的」な「過程」を彼女がいかに「説明」しようとするかは、あとでみるとしよう。ここではまず、彼女が、「資本制的生産様式の一般的かつ排他的な支配」という、「表式」のみならず「『資本論』全三巻におけるマルクスの分析の理論的前提」について説くところを聞いておかなければならない。マルクスの「前提」は、きわめて簡単に、次の一言をもって片づけられる。すなわち、「現実には、資本制的生産の排他的に支配する自足的資本主義社会などというものは、どこにも存在しなかったし、また存在してもいない」(*Ebd.* 同上。)、と。歴史的事実の問題としては、実際、これほど分り切ったこともないであろう。もちろんマルクスも、そんな「資本主義社会」が、かってどこかに「存在した」とか、現に「存在している」とかいうようなことは、どこでもいっていない。ルクセンブルクも認める通り、それは、「マルクスが首尾一貫してかつ意識的に想定した」[1]『資本論』の「理論的前提」(*Ebd.* 同上。)にほかならない。問題は、社会科学におけるこの「理論的前提」の方法論的意義にある。いいかえれば、それは、彼女が強調する「現実」なり「歴史」なりをまさに「科学的に」把握するための方法にかかわる問題[2]なのであるが、彼女にとっては、しかし、この点は、はじめから問題にもならない。わずかに、マルクスの「前提」が、「問題そのものの諸条件を変えないで、単にこれをその純粋性において説明する」ための「一つの応急処置」としては「全く差支えない」「場合」なるものを、『資本論』の各規定について、順次ふるいわけていくというにすぎない(S.318ff. 四〇七ページ以下。)。もっとも、ここで『資本論』の各規定といっても、それは、彼女の「蓄積問題」の視角からは、第一に「社会的総資本の単純再生産の分析」、第二に「個別資本の蓄積の分析」、そして最後に肝心の「総資本の著積の諸条件」の考察、この三つしかない。その一つ一つについて

も、示された理解に不明確な点、明白な誤りと認められる点が、[3] 少なからず目につくのであるが、こうした諸点は、本書の基本的内容の全体にかかわることであり、そのようなものとして、方法論の問題とともに、のちに総括的に検討する以外にない。ここでは先を急いで、マルクスの「前提」についての彼女の結論をみよう。

ルクセンブルクによれば、「現実には、総資本の蓄積の場合の実在的な諸条件は、個別資本の場合、ならびに単純再生産の場合とは、全く異なっている」。「剰余価値のますます大きな部分が、資本家によって消費されないで、生産の拡大に使用されるという条件のもとでは」、「労働者および資本家自身が総生産物を実現しうるということもまた、除外されている。彼等はつねにただ可変資本、不変資本の消耗部分および剰余価値そのものの消費部分をのみ実現しうるのであるが、こうした仕方ではしかし、従来の規模での生産の更新のための諸条件を確保しうるにすぎない。これに反して、剰余価値のうち資本化されるべき部分は、労働者および資本家によっては、とうてい実現されえない。著積という目的のための剰余価値の実現は、したがって、労働者と資本家とだけから成る一社会においては、解きえない一課題である。奇妙なことに、蓄積の問題を分析した理論家はみな、リカードウおよびシスモンディからマルクスにいたるまで、まさにこの、問題の解決を不可能にした前提から出発したのである」（S.320-1.四〇一ページ。）。――念のためにこれに、「剰余価値は、それ自身資本制的には生産をおこなわない社会階層または社会によって実現される」という「決定的な点」（S.322.四一二ページ。）をつけ加えてみれば、われわれはここに、「問題」自身が、その「解決」の方向とともに、すでに先き取りされている恰好の一例をみることができる。だから、ルクセンブルクが再度、「『資本論』第三巻における」「資本制的総過程の性格叙述」に立ち帰って、これは「暗に蓄積問題の一解決を含んでおり」、「表式の不充分なところを補足する

可能性を与えている」（S.321-2.四一一-二ページ。）――ということにはならないことは、すでにみた通りであるが、――という主張をくりかえすとき、それこそ「奇妙なことに」、これまで追求してきた「『資本論』全三巻」（むろん、その第三巻も含まれる）の「理論的前提」の問題を、いつのまにかどこかにすっかり置き忘れているからといって、苦情をいうには当らない。「想定」された「理論的前提」に関するかぎり、彼女の「問題」は、まして「問題の解決」は、その「前提」を採ると採らないとには、はじめから何の関係もないのである。たしかに、「資本化されるべき」剰余価値部分の「資本制的社会領域」（S.324.四一五ページ。）内での販売不可能ということも、また一つの「問題」ではある。だが、いわゆる「資本制的社会領域」とは何か。それは、事実上、彼女の命題を、あるいはむしろ、「資本制的蓄積」の独自の「課題」およびその「解決」の「経過」を、――彼女が別のところで「とくに注意」しているように（S.330.四二一-二ページ。）――その「純粋性において」照し出すための一つの「理論的前提」として役立つものにほかならない。相違は、ただ、同じ「前提」へのかかわり方にあるというにすぎない。

こうしてみると、『資本論』の「前提」に対するルクセンブルクのそもそもの不満は、もっぱら、「歴史的」事実問題としての「自足的資本主義社会」なるものの非「現実性」という一点にのみ、発するものとみるほかはない。事実、彼女は、『資本論』第三巻に「暗に含ま」れているという「蓄積問題の一解決」を、「マルクスの学説のほかの諸部分との一致」の故にだけではなく、さらに、「資本主義の歴史的経験および日常の実際との一致」を理由に、確証しようとさえするのである（S.321.四一一-二ページ。）。この点は、本書の理論的内容の根本にかかわる問題であり、のちに立ち入って検討しなければならない。ここでは、なおしばらく彼女の足跡を辿っ

て、『資本論』の方法論的「前提」を右のように片づけた上でおこなわれる「蓄積」の「現実」的、「歴史的」「過程」の叙述は、果していかなるものになるかということをみておこう。

（1）「蓄積の歴史的諸条件」の考察は、基本的には、次の三つの「側面」、「契機」ないし「前提」についてなされている。すなわち、(1)「事実上資本制的蓄積の死活問題である」「剰余価値の実現」（S.322.四一二ページ。）、(2)「蓄積の第二の前提として」「生産拡大の照応的な物的諸要素を見出す必然性」（S.325.四一六ページ。）、および(3)「蓄積の根本条件に属する」ところの、「資本によって運動させられる生きた労働の、蓄積の要求に適合した供給」（S.331.四二三ページ。）、これである。まず、第一の点から。——

ルクセンブルクが「二つの典型的な場合」として挙げる事例（S.322-3.四一二—四ページ。）は、彼女も少し気にするように（Vgl. S.324. 四一四—五ページ参照。）、あまり上出来なものではないから、これは措くとしよう。彼女にとっては、もちろん、「一部分は直接に、一部分は間接に」ではあれ、とにかく、「全体としての社会的剰余価値は」、——「簡単にするために資本家の消費元本」は、すでに「全く度外視」されている（S.322.四一二ページ。）のであるから、それは「社会的剰余価値」のうち「資本化されるべき部分」は、ということだが、これは、——「両部門の外部で実現され」（S.325.四一六ページ。）なければならないということ、これが肝要な「問題」なのであった。この「問題」は、いまや、いかに取り扱われることになるか。それはこうである。すなわち、「剰余価値が資本制的生産の外部で実現される」ということは、とりもなおさず、「剰余価値の物的姿態は資本制的生産そのものの欲求とは何の関係もない」ということ、「その物的姿態は、剰余価値の実現を助けるかの非資本制的領域

の欲求に照応する」(S.325.四一六ページ。)ということである、いいかえれば、「少くとも、資本化されるべき剰余価値および資本制的生産物大量中のこれに照応する部分は、資本制的領域の内部ではとうてい実現されえず、無条件にその領域の外部で、非資本制的に生産する社会階層および社会形態において、その買手を求めなければならない」(S.330.四二二ページ。)、と。――つまり、ルクセンブルクにいわせれば、「表式」の難点は、さきにもみたように、「資本化されるべき剰余価値」「部分」が、「直接資本化されるべき一定の物的姿態に縛りつけられている」(S.311.三九八ページ。)というところにあったのであり、したがって、この「物的姿態」が、「資本制的生産の外部」の、すなわち「非資本制的領域の欲求に照応する」という「条件」が、いわゆる「どうどうめぐり」からの唯一の出口となる。だが、この出口の前には、なおもう一つ別の困難が立ちはだかっている。

ルクセンブルクの主張するように、「資本化されるべき」剰余価値「部分」が、「非資本制的領域の欲求に照応」し、かくして、その剰余価値「部分」の「実現をたすける」としても、購買手段の裏づけをもたない、つまりいわゆる有効需要としてはあらわれえない、「非資本制的領域の欲求」そのものに、「剰余価値の実現をたすける」力など、はじめからないことはいうまでもない。彼女もまた、「剰余価値の実現は、第一条件として、資本主義社会の外部の購買者の一群を要求する」と述べ、しかも、ここでわざわざ、「われわれがいうのは、購買者であって、消費者ではない」(S.322.四一二ページ。)、と断わっている。[4] とすれば、これに対しては当然、いわゆる「非資本制的領域の欲求」が、単なる「消費者」としての「欲求」ではなく、まさに「購買者」としての「欲求」となりうるための条件は何かということが、重ねて問われなければならないであろう。事実、『輸出入』貿易の連関を挙げて、この点をつく評者も多い。[5] だが問題は、それほど簡単ではない。それは、一般に、資

本主義の歴史的発展に伴う資本主義諸国の対外関係の変化にかかわる諸問題の一切を、ルクセンブルクが、あくまでも蓄積の「一般的範式」の見地に抽象還元して把えようとするところにあるといわなければならないが、この点は、またのちに立ち帰って考察することにしよう。ルクセンブルクとしても、「剰余価値の実現は、問題である再生産の唯一の契機ではない」（S.325.四一六ページ。）のであるから、われわれもまた、彼女に続いて「蓄積の第二の前提」、「生産拡大の照応的な物的諸要素を見出す必然性」をみておかなければならない。

（2）まず、ルクセンブルクの「剰余価値の実現をたすけた」その同じ「取引」が、「この実現された剰余価値を生産資本に転形するための前提」を、――つまり、「資本制的に生産された剰余価値の物的姿態」（S.329.四二〇ページ。）を、――同時にルクセンブルクから「連れ去った」ことになるのは、明らかである。まさに「小難を逃れて大難に逢う」のたぐいにみえるが、それでは、この点について彼女が「もっと詳しくみ」（S.326. 四一七ページ。）た結果は、どうであろうか。

ルクセンブルクによれば、「資本蓄積がその物的諸要素において事実上いかに甚だしく非資本制的領域に縛りつけられているかを洞察するには」、さして頭を痛める必要はない。人はただ、「日常の実際および資本の歴史」に、また、「この生産様式の独自的性格」に着目して、例えば、「アメリカ連邦の奴隷諸州からの原棉」の、あるいは「農奴制ロシアの広野からの穀物」の「輸入が演ずる役割を想起しさえすればよい」（S.327-8. 四一九ページ。）。――なるほど、「すべての必要な生産手段が資本制的にのみ生産され」るものではない（S.327.同上。）ということは、誰の目にも明らかな「資本の歴史」の「事実」であり、また、やや一般的に、「本質的には資本

制的生産形態と非資本制的生産形態とのあいだの交換である世界交易は、はじめから資本主義の一歴史的実存条件である」(S.331.四二二ページ。)という点も、資本制的「生産様式の独自的性格」を示す重要な「事実」ではある。だが、ルクセンブルクその人にとってもまた、単にこうした「世界交易」による両「生産形態」のあいだの素材的連関一般を指摘するだけでは、「問題」の「解決」には、一歩たりとも近づきうるものではなかった。独自の「問題」は、やはり独自の「解決」を要求する。

すでにみたように、ルクセンブルクの見地からすれば、「資本蓄積の物的諸要素に関する問題は、資本制的に生産された剰余価値の物的姿態によってすでに解決されているどころ」では決してない(S.329.四二〇ページ。)。彼女の資本家たちは、「まさに蓄積という想定によって、たとえ――抽象的に考えて――そのために充分な貨幣をポケットにもっていようとも、彼等の剰余価値の非購買者である」(S.137. 上、一七二ページ。)。だからこそまた、「資本化される剰余価値を含む諸商品の需要者」(*Ebd.* 同上。)が求められ、「非資本制的社会階層または社会」こそが、それだと答えられたのであるが、このことはしかし、いま「問題」にしている「資本蓄積の物的諸要素」が、まさに「世界交易」によって、「非資本制的領域」で「実現される」「剰余価値の物的姿態」と「交換」に入手されるということでは、実は、はじめからなかったのである。ルクセンブルクにしてみれば、これは当然であった。もしそのようなことがおこなわれるとすれば、彼女の「問題」そのものが、立ちどころに雲散霧消してしまうことは明らかである。彼女が折角試みていることは、問題を徒らに複雑な「歴史的」「事実」の諸関係のなかで考察するというにすぎず、理論的には、事柄は結局、彼女の排撃してやまない「表式の諸連関」に帰着することにならざるをえないからである。「資本蓄積の物的諸要素に関する問題」は、こうして、ルクセンブル

クにしたがえば、「全く別個の問題に転化する」のであった。すなわち、「実現された剰余価値の生産的使用のためには、資本が、その生産手段を量的にも質的にも無制限に選択しうるために、たえずますます全地球を意のままに処理しうることが必要である」(S.329. 下、四二〇ページ。)、と。はからずもここに、われわれは、ルクセンブルクが邪魔物扱いにして「非資本制的領域」へと追いやった、あの「資本化されるべき」剰余価値部分の「物的姿態」のその後の運命を、同時に暗示されることになる。奇妙なことにそれは、「全地球」上のどこかに、どのようにしてか、すっかり消失したかのようであり、ために、これに対応して、彼女の「資本」は、蓄積の「物的諸要素」を新たに——全く新たに——獲得するために、「たえずますます全地球を意のままに処理しうる必要」に迫られることになる。「問題」は、たしかに、「全く別個の問題に転化し」ている。だから、『資本論』第一巻第七篇「資本の蓄積過程」におけるマルクスの、「蓄積の諸要素」の「拡大」を可能にする諸条件の考察が、ルクセンブルクの手で「全く別個の」取扱いをうけることになるのも、もはや怪しむに足らない。彼女の「問題」の特徴的なところがよく出ているので、もう少しその点をみておこう。

ルクセンブルクがここで援用しようとするのは、「概括的」に次のように「結論」されるマルクスの叙述である。すなわち、「資本は、富の二つの原形成者である労働力と土地とを、自己に合体することによって、一つの膨脹力を獲得するのであって、この膨脹力によって資本は、一見それ自身の大いさによって置かれた限界を超えて、すなわち、資本がそれにおいて定在するすでに生産された生産手段の価値と分量とによって置かれた限界を超えて、自己の蓄積の諸要素を拡大することができる」（『資本論』青(4)九三九ページ、岩(三)一六四ページ。）、これである。みられる通り、きわめて簡潔にして明確な「結論」であるが、これを援用してルクセンブルクが説くの

は、およそ、次のようなことである。彼女はいう、「旧来の源泉からの原料の供給における一切の不慮の転変と中断とに、また、社会的需要の一切の突発的拡大に応えるために、無制限に新らしい原料領域に突如として着手することは、その伸縮性と飛躍性とにおける蓄積過程の欠くことのできない諸前提条件の一つである」（S. 329. 四二一ページ。）、と。続いて彼女は、『棉花飢饉』のさいに直ちに「起った」「エジプトにおける新たな大々的な棉花栽培」など、いくつかの歴史的事例を証拠に挙げる（*Ebd.* 同上。）のであるが、いずれにせよ、右にいう「蓄積過程」の「伸縮性と飛躍性」なるものが、マルクスの説く「資本」自身の「膨脹力」とは「全く別個の問題」であることは、一見して明らかであろう。「非資本制的領域」において、「無制限に新らしい原料領域に突如として着手し」うるということが、ほかならぬ「資本」の「蓄積過程の欠くことのできない諸前提条件の」、少くとも「一つ」とされているのである。いかにしてもこれは、もはや『資本論』の解釈によって補強されるような「問題」ではない。「資本が、富の二つの原形成者である労働力と土地とを、自己に合体することによって、……一見それ自身の大いさによって置かれた限界を超えて、……自己の蓄積の諸要素を拡大しうる」ということは、「資本の蓄積過程」が自立的におこなわれ、したがってまた、いわゆる「資本制的生産様式」が一社会を支配する「生産様式」として確立しうる一つの根拠を明らかにするものである。ルクセンブルクの「問題」は、しかし、そうではない。それは、単に、「資本の蓄積過程」とその「与えられた歴史的環境」（S.337. 四三〇ページ。）との――さしあたって――素材的連関の諸「事実」の「問題」であるだけではなく、もっぱらこの「環境」においてのみ見出されなければならないものとしてその「解決」が求められる、「資本」の「蓄積の諸要素」の「拡大」を可能にする諸条件の「問題」である。この点についてのこれ以上の検討には、しかし、なお多少の準備的

考察が要るので、それは、のちにゆずることにしよう。だが、それにしても、「非資本制的領域」においてとくにその「弾力性」（『資本論』青、同上、岩㈢一六三ページ。）を要求されるルクセンブルクの「労働力」とは、いかなるものであろうか。彼女のいう「蓄積」の第三の「条件」をみなければならない。

（3）「資本によって運動させられる生きた労働の、蓄積の要求に適合した供給」は、ルクセンブルクの指摘する通り、まさに「蓄積の根本条件に属する」きわめて重要な問題であるが、この問題についてわれわれは、彼女からまず次のような説明を聞く。――「資本制的生産は、この追加労働力を、非資本制的な諸階層および諸国からのみたえず得ることができる」。マルクスが『資本論』第一巻第二十三章第三節で「分析」している「産業予備軍」の「諸範疇は、すべて形態こそ異なれ、それ自身すでに資本制的生産の分泌物であり、あれこれの形態で使用されかつ過剰にされた賃金プロレタリアである」が、しかし、「問題」は、そこにあるのではない。この「産業予備軍」そのものがさらに「もたなければならない」「他の社会的貯水池」、すなわち、「それまではまだ資本の指揮下になく、需要に応じてはじめて賃金プロレタリアートに追加される労働力が流れ出てくる他の社会的貯水池」こそが、「問題」なのである。いいかえれば、「資本制的生産様式のではなく、先資本制的生産様式の、その崩壊およびその解体の進行過程における分泌物としての、非資本制的諸関係から資本制的諸関係への労働力のたえざる移行」、「原始的な社会的諸関係からの労働力の分離の過程と、資本制的賃金制度によるその吸収と」、これこそまさに「資本主義の欠くことのできない歴史的基礎の一つである」（S.333-4. 四二四―七ページ。）。――つまり、ここでもまた、ルクセンブルクの「問題」は、マルクスの「分析」とは直接関係のない、

「全く別個の問題」であったということになる。

マルクスは、ルクセンブルクも指摘するように、たしかに「資本主義的発展の高度な段階にあったイギリスの諸関係に注目して」(S.333. 四二五ページ。)、「産業予備軍」の「諸範疇」を「分析」している。[6] ルクセンブルクの不満は、一つには、そうした「分析」の時間的場所的な、つまり歴史的な制約性にあったもののようであるが、この点は、しかし、当面の議論の本筋には関係がない。マルクスにしても、まず、その「種々の存在形態」にかかわりなく「資本制的生産様式に特有な人口法則」(『資本論』第一巻、青(4)九七八ページ、岩(三)二〇八ページ。)を明らかにしているのであり、批判者自身もまた、「形態こそ異なれ」「諸範疇」を「すべて」一括して「資本制的生産の分泌物」として把えた上で、なおこれを不充分として斥けているのであるから、ここでのルクセンブルクの「問題」の独自の性格を見極めるには、さしあたり、その程度の理解の一致があれば充分である。さて、そのルクセンブルクに対して、マルクスの相対的過剰人口の一般的規定が何の助けにもならなかった理由は、きわめて簡単である。それはほかでもない、すでにして先き取りされた「問題」そのものにある。マルクスが詳細に論じている「蓄積とそれに伴う集積との進行中における可変資本部分の相対的減少」(『資本論』第一巻第二十三章第二節)およびこれによる「相対的過剰人口、または産業予備軍の累進的生産」(同上、第三節)は、「資本の蓄積過程」が、まさにその「根本条件」をなす労働力の商品化の社会的確保の「諸条件」を、みずからつくりだす過程でもあるということ、そして、「資本制的生産様式」は、こうした「特有の人口法則」をみずから展開しうるものとして、はじめて一社会を支配する「生産様式」たりうるものであるということを、明らかにしようとするものである。そこには、週期的恐慌の規定にきわめて貴重な手がかりを与えるものとみられる、相対的過剰人口

の吸引と再形成との運動への関説さえ、おこなわれているのであるが、しかし、ルクセンブルクにとっては「問題」は、あくまでも「産業予備軍」の、さらにその背後にある流入源泉にあり、したがって、右に簡単に指摘したようなマルクスの「分析」の意義は、はじめからその視野の外にある。それでは、彼女の「問題」の視角に捕捉される「追加労働力」は、いかなる姿態で現われるか。

「資本制的生産は、白人種だけの労働力で済ますことはできない」、ルクセンブルクは、まずこう説明して、続ける。「資本は、白人種が労働しえない地帯を利用するために、他の人種を必要とする。すなわち資本は、総じて、地上の一切の生産諸力を――これが剰余価値生産の諸制限内で可能なかぎり――動員するためには、地球上の一切の労働力を無制限に意のままにしうることを必要とする。だが資本は、これらの労働力を、たいていは、伝来の先資本制的生産諸関係の強固な束縛のうちに見出すのであって、それらの労働力は、資本の活動的軍隊に編入されるためには、まずこの束縛から『解放』されなければならない」(S.334. 四二六ページ。)、と。――ほかならぬ「資本蓄積」のための「追加労働力」の「供給」は、いかにして確保されるかという当初の論点が、いつのまにか、「白人種が労働しえない地帯を利用するため」の「他の人種」の「必要」なる「問題」に移行しているからといって、ここで驚ろく必要はない。「産業予備軍」の「諸範疇」は、単に「それ自身すでに資本制的生産の分泌物である」にすぎないからということで、――さきにもふれたように、それは、ここでの議論にとってはさしあたり充分に正確な理解であるといってよいが、しかしただこれだけの理由で、――即座にこれを棄てて、「産業予備軍」そのものの「他の社会的貯水池」を「問題」にするルクセンブルクの見地からすれば、それはむしろ自明の筆の運びである。彼女の次の叙述は、「問題」の輪郭をくっきりと浮び上らせる。「最初の純資本制

的な生産部門としてのイギリス綿工業は、北アメリカ連邦の南部諸州の棉花なしには不可能だったであろうが、単にそれだけではない、それはまた、栽培のための労働力を提供するためにアメリカに移植され、そして南北戦争ののちには自由なプロレタリアートとして資本制的賃金労働者階級に成長した数百万のアフリカ黒人なしにも不可能だったであろう」（*Ebd.* 四二七ページ。）、と。

たしかに、「イギリス綿工業」が、「北アメリカ連邦の南部諸州の棉花なしに」、また、これを「栽培」する「数百万のアフリカ黒人なしに」「可能であった」などと主張する者は、よほど突飛な空想家ででもないかぎり一人もいないであろう。それは、動かすことのできない厳然たる一個の歴史的事実である。だが、「必要な一切の生産手段および消費手段」の、したがってまたこれを生産する諸労働の、地球大の規模での連関の諸事実を列挙しただけでは、資本主義社会の歴史的過程については、ほとんど何もいったことにはならないということ、これもまた同様に明白なことである。ルクセンブルクにしても、まさに「資本主義的発展の高度な段階にあったイギリスの諸関係」との「関連において」、「産業予備軍」のさらに「別の」流入源泉をこそ「問題」にし「顧慮」すべきことを――マルクスに対して――強調して、「農民経済および手工業的小経営の没落」のみならず「種々の原始的な生産＝および社会形態の解体」の過程を論じているのである（S.333-4.四二五ページ。）。こうした「資本」による旧社会関係の分解過程は、いかにも、「資本主義の欠くことのできない歴史的基礎の一つである」にはちがいないが、それはしかし、資本主義の歴史的発展の時期と、また「地帯」ないし「諸国」とにかかわりなく一様におこなわれるものでは決してない。すなわち、それは、一般に資本主義の世界史的発展の各段階における商人資本、産業資本および金融資本としての資本の蓄積様式を、つまり、資本が労働力の商品化を自己に確保

する方式を、その歴史的推移に即していかに具体的に規定するかという問題であるが、この点からの検討は、しばらく措くとしよう。さしあたりルクセンブルクの前記の「問題」に限っても、「北アメリカ連邦の南部諸州」におけるいわゆる植栽制度の歴史的規定については、少くとも、次のような諸点、――「イギリス綿工業」における産業資本の確立が、「イギリスに児童奴隷制を導入すると同時に、合衆国の従来の多かれ少なかれ家父長制的な奴隷経営を、商業的搾取制度に転化する動因を与えた」（『資本論』第一巻、青(4)一一五五ページ、岩㈢四一〇ページ。）こと、そして、まさにこうした「商業的搾取制度」として、「合衆国の奴隷経営」は、――「数百万のアフリカ黒人」が「自由なプロレタリアート」に「成長する」しないにかかわりなしに、――「イギリス綿工業」産業資本の景気循環の過程と、この時期特有の「世界交易」を通して密接に連動する関係に、ますます深く把えられるにいたったこと、こうした諸点を無視することはできないであろう。それだけではない。さらに重要な論点が、ここにある。

旧来の「生産＝および社会形態」の「没落」ないし「解体」を、一方的に間断なく、かつ「地球上」に全面的におこなわれる過程として把えるのみならず、この過程をもって「蓄積の根本条件に属する」ものとするルクセンブルクの主張が、いかに一面的であり、性急にすぎるかは、――のちにふれるような、旧社会関係の分解過程の、とくに帝国主義段階におけるいわゆる農業問題等々としての発現を、ひとまず別としても、――「近代」の『組織的植民』の「処方」に対するマルクスの批判的省察（『資本論』第一巻第二十五章「近代植民理論」）が、これを逆の面から明らかにしている。――マルクスが取り上げるのは、いうまでもなく、「植民地の状態」（青(4)一一七四ページ、岩㈢四三三ページ。）そのものではない。「真の植民地、すなわち自由な移民によって植民される処

女地」（青(4)一一六一ページ、岩㈢四一八ページ。）における資本主義的発展が当面する問題に対する『組織的植民』の「処方」なる資本家的対応が、ほかならぬ「母国の資本制的諸関係に関する真理」（青(4)一一六二ページ、岩㈢四一九ページ。）をあからさまに語るものとして、これを取り上げたのである。それは単に植民地における資本主義化の問題にとどまるものではなく、むしろ、一般に「資本制的生産様式」の輸入による後進国の資本主義的発展の過程の特殊性を典型的な形で示すものといってよい。(7) マルクスによれば、「旧世界がたえず投げ入れる」「搾取に飢え節欲を求める資本」（青(4)一一六七ページ、岩㈢四二五ページ。）は、機械制大工業とともに、「イギリスの生産諸関係」（青(4)一一六三ページ、岩㈢四二〇ページ。）をも同時に輸入することなしには、その「支配体制」（青(4)一一六一ページ、岩㈢四一八ページ。）を確立しえない。だが、植民地におけるこうした資本関係の形成は、――ルクセンブルクのみるところとは、まさに逆に――流入する移民の「独立自営の農民または手工業者」への「不断の転化」（青(4)一一六七―八ページ、岩㈢四二五―六ページ。）の傾向に対抗しておこなわれるほかはなく、「資本の蓄積に比例しての過剰な賃金労働者の生産」はおろか、「賃金労働者としての賃金労働者の規則的な再生産」でさえ、「きわめて厄介で、一部は克服しがたい障碍にぶつかる」ことになる。つまり、資本に対して「労働市場」を、したがってまた「資本家に対する労働者の、かの必要不可欠な社会的従属」を「保証」する「相対的過剰人口」（青(4)一一六七ページ、岩㈢四二五ページ。）――これをルクセンブルクの言葉で「資本制的生産の分泌物」といいかえてもよい――の形成を妨げるこうした「植民地の反資本主義的癌腫」の「治療」（青(4)一一七一ページ、岩㈢四二九ページ。）こそ、まさに『組織的植民』の目ざすところであった。もちろん、思いもよらぬ結果以外に、「処方」の効目は全くなく、また、アメリカ合衆国において、一方では、「尨大で連続的な」年々の移民の流入が「東部に停滞的

な沈澱を残す」とともに、他方では、「国債」、「租税」等々の諸方策に助長されつつ「きわめて急激な資本の集中」がおこなわれるにつれて、「資本制的生産が巨歩を進め」るにいたったことによって、「処方」そのものが無用の長物と化することになった（青(4)一一七三ページ、岩㈢四三一―二ページ。）のであるが、それはともかく、「資本制的生産＝および蓄積様式」（青(4)一一七四ページ、岩㈢四三三ページ。）が、一旦、以上のような基礎を得て確立すれば、のちに考察するように、もともと、商品生産に適応しうる諸条件を欠いている小生産者の残存そのものは、もはや問題にはならない。先進的なるが故に「典型的な」（青(4)一〇九六ページ、岩㈢三四三ページ。）資本の原始的蓄積の過程を経て確立したイギリス産業資本も、ルクセンブルクのいわゆる「地球上」の「伝来の先資本制的生産諸関係」に対する関係としては、まさにそのようなものとして確立したのであり、したがって、それは、こうした「先資本制的生産諸関係」、あるいは「産業予備軍」の「他の社会的貯水池」によって「根本」的に「条件」づけられるようなものでは断じてないということ、この点については、もはや多言を費すまでもないであろう。

さて、ルクセンブルクの「蓄積の第三の基本的契機」（S.331. 下、四二二―三ページ。）についての考察が、すでにみたように、「資本制的生産は他の諸社会構成体からの労働力なしに済ますことはできない、という事実」（S.335. 四二七ページ。）の確認という、まことに彼女らしからぬ凡庸な結論に終るとすれば、彼女としても、さきの「蓄積の第二の前提」同様、これをもって「蓄積問題」の核心をなすものとはなしえないであろうということは、容易に推察される。果して彼女は、「蓄積の」三つの「側面」、「契機」、あるいは「前提」をかえりみて、その間の「区別」について次のような考察をおこなうのである。――「剰余価値の実現の諸条件と、その物的姿態

における不変資本および可変資本の拡大の諸条件とのあいだには、一つの重要な区別がある」。後者についていえば、「資本は、全地球の生産手段および労働力なしに済ますことはできないのであって、その蓄積運動の故障ない開展のためには、一切の地帯の自然財宝および労働力を必要とする」。しかるに、「これらのものは、事実上、大多数が先資本制的生産諸形態の束縛のうちに見出される――これが資本蓄積の歴史的環境である――」、そこで、「こうした地帯や社会を横奪しようとする資本の狂暴な衝動が」、「資本がこれらの国や社会を隷属下におこうとする努力」が、生ずる。ところが、「剰余価値の実現は趣きを異にする。これは、はじめから、非資本制的な生産者および消費者に結びつけられている。だから、剰余価値の非資本制的買手の実存は、資本およびその蓄積のための直接的な生活条件であり、したがってそのかぎりにおいて、資本蓄積の問題における決定的な点である」(S.337-8. 四三〇―一ページ。)、こうルクセンブルクは説く。――われわれは、ここでようやく、彼女の「問題」およびその「解決」の全容を把えうるところにきた。

ルクセンブルクにとっては、「不変資本および可変資本（ならびに剰余価値の消費部分）の更新」は、独自の仕方で年々その規模を拡大しなければならないとはいえ、それ自身は、ともかく「全地球」上に「事実上見出される」「生産の広汎な基礎および前提条件」であるにすぎず、資本制的「生産の本来的目的および推進的動機」は、あくまでも「剰余価値の実現」にある(S. 339. 四三二ページ。)。いいかえれば、彼女のいう資本の「蓄積運動」に不可欠な「全地球の生産手段および労働力」は、何よりもまず「剰余価値の実現」を『第一幕』としてはじめて起動しうる「蓄積運動」の『第二幕』に、「蓄積の目的に照応した現物形態」(S.111. 上、一三九ページ。)への、「実現」された「剰余価値」の再転化にのみかかわる「問題」にすぎない。しかも、「生産手段」――と

きに落ち、ときに加えられる「消費手段」を改めてこれにつけ加えてもよい――の追加的供給の「諸条件」と、「追加労働力」の供給のための「諸条件」とは、本源的にはいずれも、「先」ないし「非資本制的領域」内に、すでにして「事実上見出される」というのであるから、この関連においてなお「問題」になるのは、ただ、これらを「横奪しようとする資本の狂暴な衝動」ないし「努力」だけということになる。これをもってルクセンブルクは、「今日の帝国主義的政策ならびにその経済的根底の実際」の重要な一面に迫るものとみているようであるが、しかし、一見明らかな「資本主義の歴史的経験および日常の実際」との符合、必ずしもその「経済学的説明」たりうるものではないことは、のちに立ち帰ってみる通りである。

こうしてみると、ルクセンブルクの「問題」およびその「解決」の試みの一切は、いまや明らかに、きわめて簡単な、まさに「決定的な」次の一「点」に集約されることになる。すなわち、「生産手段および労働力」の追加的供給によって「蓄積が遂行されたのちに」さらにいっそう「増加した剰余生産物」(S.119. 上、一五〇ページ)の「買手」はどこにいるか、より正確にいえば、このいまや「増加した剰余生産物」のうち「蓄積されるべき」部分に対する「さらにより大きな将来の販路の見込み」はいかにして確保されるかという、まさに「流動の只中において」把えられたルクセンブルクの「資本の蓄積過程」に、恒常的に現存する一個同一の「問題」と、したがってまた、「資本およびその蓄積のための直接的な生活条件」である「剰余価値の非資本制的買手の実存」の「必要」と、これである。こうして、結局、われわれは再び、あの「資本制的蓄積」の「一般的範式」の見地に連れ戻されたことになる。「蓄積の歴史的諸条件」についてのルクセンブルクの委曲をつくした考察は、すでにこの簡単な「範式」に包含されている一切の諸連関から――しかし、のちにみるように、彼女の見地からさえも、

必ずしも整合的にではなく――引き出される諸々の帰結の総和にほかならない。ルクセンブルク自身は、こうした「資本制的蓄積」の基本命題をもって、「マルクス学説の意味で」の「弁証法的矛盾」（S.338. 下、四三一ページ。）、つまり「歴史的弁証法」（*Antikritik*, S. 115.『再論』七三―二ページ。）を明らかにし、もって、「資本主義の崩壊の客観的な歴史的必然性」、したがってまた、「資本の歴史的生涯の終末の時代としての、最後の、帝国主義的な段階の、矛盾に充ちた運動」（*Akkumulation*, S. 393.『蓄積論』下、五〇一ページ。）を論証しうる確固たる理論的基礎を得たものとするのであるが、果してそういえるかどうか、続いてこの点の検討に入らなければならない。ともかく、資本の「蓄積運動」およびこれを基軸とする資本主義社会の「客観的な歴史的傾向」（*Ebd.* 五〇〇ページ。）に関するルクセンブルクの所説を、その基本的な諸点について検討するためには、ほぼ以上の概観で充分であろう。

（1）必ずしも「首尾一貫して」はいないというところに、むしろ『資本論』の方法の、したがってまた、そのかぎりでその理論的内容にもかかわってくる、問題があることは、宇野弘蔵氏が、とくに利子論の究明にさいして、くりかえし指摘される通りである。

（2）拙論「経済学における論理と歴史――鈴木鴻一郎教授の『世界資本主義論』の問題提起に寄せて――」（武田隆夫他編『資本論と帝国主義論』上、一九七〇年、東京大学出版会、所収）参照。

（3）ルクセンブルクが、『資本論』第一巻をもって、「個別資本の蓄積の分析を与える」ものとする（S.318. 下、四〇八ページ。）点は、明らかに誤っているといわなければならない。「個々の資本家にとって、蓄積がいかにおこなわれるかは、第一巻で明らかにされた」云々という――ルクセンブルクも、他のところで引用している（S.111. 上、一四〇ページ。）――『資本論』第二巻第三篇第二十一章の書き出しの部分が、その典拠とされているようであるが、マルクスがここで説いていることは、しかし、必ずしもルクセンブルクの解釈の補強にはならない。のちにみるように、『資本論』のこの章での「蓄積の表式的説明」も、表式論としては当然、商品資本の循環形式の

見地からおこなわれるものであり、そして、その商品資本の循環形式は、同じ第二巻の第一篇第三章に明らかにされている通り、「個別的産業資本に共通な一つの運動形態」でもある。さきの第二十一章の書き出しの部分にしても、一読すれば誰の目にも明らかなように、それは事実上、この循環形式によって、「個別資本にとっての蓄積」に簡単にふれるものにすぎない。これをマルクスが、「第一巻で明らかにされた」とすることの方が、むしろ疑問であろう。なお、この点は、第一巻第七篇の蓄積論が、資本の再生産過程を、しかも――もちろん総資本による――物の再生産によって同時に資本家と労働者との社会的関係をも再生産する過程として、論ずるものでありながら、こうした再生産過程を媒介する資本の流通過程を、単に捨象することからはじめられているという点とも関係する問題であり、のちに立ち帰って考察することにしたい。いずれにせよ、さきのマルクスの叙述を引いて、『資本論』第一巻をもって、「個別資本の蓄積」を「分析」するものと断定するのは、いささか無理のようである。

(4) もっとも、その理由というのは、「剰余価値の実現は、はじめから、剰余価値の物的姿態については全く何も意味しないからである」(S. 322. 下、四一二ページ。)、というのであって、あまりはっきりしない。もともと、ルクセンブルクにとっては、「剰余価値の実現」は、「剰余価値の物的姿態が非資本制的領域の欲求に照応する」(S. 325. 四一六ページ。)ことなくしては、つまり、その「領域」の――むろん購買力をもった――「消費者」としての登場なくしては、ありえないはずである。事実、彼女は、『蓄積論』の別のところでは、「問題」との関連において、はっきりと「消費者」のことを語っている。すなわち、「問題は、剰余価値を実現するための貨幣はどこからくるか、ではなく、剰余価値のための消費者はどこにいるか、でなければならない。そうすれば、貨幣がこれらの消費者の手にあって、流通に投じられなければならない、ということはおのずから明らかである」(S. 131. 上、一六四ページ。)、というのであるが、いうまでもなく、「消費者」に「貨幣」がついて廻ることが、「自明のこと」ではないということ、これが、まさに、本文でふれた問題であった。

(5) 例えば、スウィージー、前掲訳書、二五四―五ページ。

(6) 「イギリスの諸関係に注目し」てなされたマルクスの「産業予備軍の分析」が、いわゆる窮乏化法則論として展開されているところに、むしろ問題があるが、それは、ここでの議論には関係がない。

(7) この点で、いわゆる幼弱産業保護の主張をもってあらわれる後進国の資本主義化の過程が、産業資本による資本の原始的蓄積の過程にほかならないことを明らかにする宇野弘蔵『経済政策論』（一九五四年、弘文堂）第二篇第三章第三・四節は、示唆するところ多い。

（末　完）

付記　本稿では、『資本蓄積論』の基本的内容を概観するにとどめ、その総括的検討は、追って別稿でおこなうことにしたい。